

Abramson, Scott F., David B. Carter. 2016. "The Historical Origins of Territorial Disputes." *American Political Science Review*. 110 (4) pp. 675–698.

法学研究科 D3 ソングェヒョン 宋財 沚

1 概要

- 歴史的に存在してきた国境線が領土紛争の中心的な要因であることを実証
- ウェストファリア条約からフランス革命までの国境線が、ウィーン体制以降の紛争にどのような影響を与えたかを筆者ら独自のデータを用いて実証

2 仮説

- 制度遺産として国境
 - 国境線で区切られている共同体は既にネットワークなどが確立、固定 (lock-in) されているため、この共同体の修復のために領土紛争
- 経済的価値
 - 自然資源など経済的価値を巡って領土紛争

3 データ&操作化

3.1 地理データ

- 1650–1789 年の国境データ
 - 国境の定義: 1) 軍隊によって占拠されていないこと、2) 徴税をする共通の権力があること、3) 共通の行政府を持つこと、全てを満たす場合
- ヨーロッパを $225 \times 225\text{km}$ のグリッドで分割。
- 各グリッドに固有 ID (i) を付与
- 観測の間隔は 5 年であり、時間の ID (t) を付与

3.2 応答変数

- Hensel の ICOW¹⁾ データ
- 紛争の回数: 1815 年以降、 i におけるの紛争の回数
- 初紛争までの期間: 1815 年 11 月以降、 i におけるの初紛争までの期間

3.3 説明変数: 制度遺産として国境

1. 国境の密度 (*Historical Border Density* _{it})
 - t 期におけるグリッド i 内の国境の長さを陸地の面積を割ったもの
2. 国境の変動性 (*Historical Border Variability* _{i})
 - $\sum_{t=1}^T \sqrt{(Density_{it} - \overline{Density}_i)^2}$
3. 国境変更の有無
 - *Border Changes* _{it} : t 期における国境変更の有無 $\in \{0, 1\}$
 - *Border Changes* _{i} : *Border Changes* _{it} の総和
4. 平均国境存続期間 (*Average Border Duration* _{i})
 - グリッド i 内の国境線が維持された期間の平均値
5. 国境の最終変更からの平均時間 (*Average Time Since Last Change* _{i})
 - グリッド i 内の国境線が最後に変更されてから 1815 年までの期間

3.4 説明変数: 領土の経済的価値

1. 都市部の人口: *Urban Population*
2. 製鉄所の数: *Iron Production*
3. 降水量に基いた農業適合度: *Agricultural Suitability*
4. 河川の長さ: *River Length*
5. 山の割合: *Terrain Ruggedness*
6. 緯度、経度²⁾: *Latitude, Longitude*
7. エスニシティの数 (Online Appendix)

¹⁾ The Issue Correlates of War. URL: <http://www.paulhensel.org/icow.html>

²⁾ 欠落された空間変数のコントロールする効果

4 分析結果: 紛争の回数とタイミング

- Figure 1 (p. 686): 国境の変動性と紛争の回数には密接な関係
- Table 1 (p. 683): 従属変数を紛争の回数にした OLS と NB 回帰
 1. 変動性と紛争の回数は正の関係
 2. 変動性 (*Variability*) は密度 (*Density*) の代理変数ではなく、独立した要因
 3. 変動性の効果は領土の経済的価値とは独立
 4. 変動性の効果は他の欠落変数と独立
- Table 2 (p. 688): 従属変数を初紛争のタイミングとした OLS と Cox 比例ハザード
 1. 変動性の高いグリッド → 初紛争のタイミング早
- 経済的価値は一部の変数・モデルのみにおいて仮説を支持
- 変動性 × 経済的価値の交互作用も仮説支持 ×
- 制度遺産として国境 → 経済的価値 → 紛争を仮定した媒介効果分析 (Imai *et al.*, 2011) においても直接効果 (Direct effect) は変化なし
- Table 3 (p. 690): 従属変数を、紛争が国境線付近か否かで分割した OLS と NB 回帰
 1. 国境線付近以外の紛争は変動性と関係 ×
 2. 変動性は制度遺産として国境線の効果を正しく表現

5 分析結果: 制度遺産としての国境の分散と紛争への誘因

- 定着された (well-established) 国境線は国家のリーダーにとって紛争の誘因となる
- 国境の変動回数 (*Border Change_i*) と国境の平均持続期間 (*Average Border Duration_i*)
- Table 3 (p. 694)
 1. Column 9 and 10: 変動回数と平均持続期間の交互作用 ○
 2. Column 7 and 8: 変動回数と最終変動からの平均期間の交互作用も ○
- Figure 2–3 (pp. 692–693): 効果量 (Table 3 の 8, 10 列目の結果に基づく)
 1. Figure 2: 国境の変動回数が多い地域において、国境が平均存続期間が紛争回数に与える影響大
 2. Figure 3: 国境の変動回数が多い地域において、最後の国境変動からの期間が紛争回数に与える影響大
- Figure 4 (p. 695): (Figure 2, 3 では扱わなかった) 変動性が紛争に与える影響

1. 一般化加法モデル (GAM) による推定
 2. 二次曲線の形ではあるが、約 90% のデータにおいて変動性と紛争の回数は正の関係
- 制度遺産と経済価値、どっちが正しいか
 - 経済価値仮説が正しい場合、国境の変動は常に同じ地域で起こるはず
 - しかし、50 年単位で変動の相関を見る場合、 $\rho = 0.55 \rightarrow 0.28$

6 コメント

- Figure 4 では約 90% は仮説通りになっているが、変動性が高すぎると紛争が減るという結果も。何かロジックはないか。単なる外れケースなのか。
- 過去の国境線が制度遺産として扱うことは可能だが、果たして著者が主張したメカニズムとおりののか。
- (門外漢だからかも知れないが) 全体的にもやや感が...